ずいひつ①　ZUIHITU

持続可能な経営に向けて

愛知県公営企業管理者
企業庁長
権田　裕徳

私は、今年４月に水道事業、工業用水道事業及び用地造成事業を管轄する公営企業管理者に就任しました。

これまでの公務員人生の３分の２は人事分野で務めてきており、企業庁の業務は初めてとなります。

水道事業・工業用水道事業は県民の生活や企業活動を支える重要なライフライン事業であり職責の重さに身の引き締まる思いとともに、初めて携わる仕事に新鮮さとやりがいを感じています。

私自身、2016年に発生した熊本地震では、被災地に職員を派遣する一方で、志願して現地に入り避難所の運営支援などを担当し、見聞きしていた以上の被災と混乱を肌で感じました。

近年では、全国の各地で災害が激甚化、頻発化しており、2024年に発生した能登半島地震の被災地の能登町に、企業庁から復興支援という形で職員を派遣しています。今年７月、派遣職員の激励のため同町を訪問した際には、今もなお残る地震の爪痕を目の当たりにし、生活を支えるライフラインの重要性を感じました。

昨今、水道や工業用水道については、能登半島地震での被害状況や埼玉県八潮市の道路陥没事故、全国の水道管漏水事故など、インフラ関連の報道が取り上げられる機会も増えており、被災地での経験からも「地震防災対策と老朽化対策の重要性」を改めて認識するところです。

公営企業は、料金収入をもって経営を行う独立採算制を基本原則としながら、住民生活に身近な社会資本を整備し、必要なサービスを提供する役割を果たしています。

将来にわたり、受水団体や受水事業所に水道用水・工業用水の安定供給を行い、地域の暮らしと経済活動の基盤や企業の産業活動の維持・発展を支える使命を果たしていくため、全力で業務に取り組んでまいります。

見えないところに重要な価値

東京大学
准教授
橋本　崇史

先日、フランスのルーヴル美術館で、歴史的に貴重な宝石類が盗まれる事件がありましたが、その手口を聞いて耳を疑いました。梯子車から窓を破っての白昼堂々の犯行、まさに「ルパン三世」や「キャッツ･アイ」を彷彿とさせる手口で、驚くと同時に、本当にこんなことが起こるのかと、なんとも不思議な感覚を覚えました。

ルーヴル美術館といえば、年間約900万人が訪れる世界屈指の美術館です。その警備体制は当然ながら盤石であろうと“思い込んで”いましたが、現実はそうではなかったようです。報道によると、建物や設備の老朽化が進む中、セキュリティへの投資が十分に行われていなかったらしく、以前から警備上の課題は指摘されていたものの、その対策は道半ばだったなかでの事件でした。

このような盗難の責はもちろん犯人にあるのは当然ですが、この事件から、当たり前（と思いこんでいる）の安全は見えない不断の努力によって保たれている、という事実を改めて認識させられました。と同時に日本の水インフラで起きている現状とのアナロジーを感じざるをえませんでした。

国内の水道では、渇水にならない限り、蛇口をひねれば安全な飲み水がいくらでも出て、それが滞ることなどほとんどの人は疑うことはないでしょう。同様にトイレや排水についても機能するのが当たり前と認識されています。しかし、その裏では老朽化が静かに進んでおり、漏水や災害時の被害拡大へとつながり、事故や大規模災害の報道等により、ようやくその危機的な現状が一般にも認識されるようになりました。

ルーヴル美術館での盗難も、水インフラの老朽化も、“安全神話”、“思いこみ”がリスクを覆い隠してしまった、という点では類似しているように思います。事件や大事故が起きてからでは遅いと分かりつつも、往々にして見えない基盤の危うさには無関心になり、後回しにしてしまいがちです。見えないところにこそ重要な価値がある、という単純ですが、忘れがちな教訓を、今回のニュースで改めて突きつけられていると感じました。